日本語における副詞の用法

－高校生に対する副詞の教え方－

Nurjanah

Guru Bahasa Jepang SMA Kemala Bhayangkari 1 Medan

Abstraksi

Kata keterangan dalam bahasa Jepang disebut *Fukushi* . *Fukushi* adalah salah satu bagian dari *hinshi* (kelas kata dalam bahasa Jepang) yang dapat berdiri sendiri, tidak berubah bentuk dan pada dasarnya banyak menerangkan penekanan, ketetapan/ kepastian terutama pada kata-kata yang termasuk dalam *yougen* (dalam hal ini kata kerja dan kata sifat). Dalam penelitian ini membahas juga mengenai cara mengajarkan kata keterangan yang terdapat dalam buku *Minna no Nihongo* 1 pada siswa SMA dengan menggunakan metode pengajaran dari Japan Foundation. Pada metode pengajaran ini menitik beratkan pada 3 tahapan yaitu : 1) Pengenalan, 2) Latihan dasar, 3) Latihan penerapan. Dengan menggunakan metode ini maka siswa diharapkan dapat mengerti (分かる), mengingat (覚える) dan menggunakan (使える bahasa Jepang sederhana dalam percakapan sehari-hari dengan sesama temannya yang belajar bahasa Jepang juga maupun dengan guru bahasa Jepangnya.

Kata Kunci: *Fukushi*, Alur Pengajaran *Fukushi*, Kemampuan komunikasi

1. はじめに

国際交流基金が2006年から2009年にかけて行った日本語学習者数についての調査結果によると（国際交流基金ジャカルタ日本文化センター2012）、3年間のうちに27万人に増加している。その数の95%は高校生である。

一方、インドネシアで日本語を勉強する人の数が増加するとともに、日本語を教える先生も増えていくと考えていた。しかし、実際には、日本語の先生数は少なく、日本語力もたりないということを聞いたり、見たりした。また、上述調査によると、日本

語の先生数を増やし、日本語力を高め、教授法力も発達させなければいけないとされている。

本稿では、インドネシアの高校で主に用いられている『みんなの日本語１』に出てくる副詞を研究の対象とする。そのため、まず、仁田(2000)と日本語記述文法研究会(2010)の副詞の分類を使って、『みんなの日本語１』に出てくる副詞を分類する。その後、高校における副詞の教え方の例を紹介する。

2. 副詞

2.1 副詞の定義

副詞は、単語を文法的に分類した〈品詞〉の一種に数えられるもので、それ自身語形変化（活用）をせず、もっぱら用言またはそれ相当の語句を修飾（限定．強調）することを基本的な役割とする語をいう。また、副詞は、動詞、形容詞、副詞を修飾する(日本語記述文法研究会 2010)。

- 涼しい風がそよそよ（と）吹いている。（動詞を修飾する）
- 店が開いたのは、かなり遅かった。（形容詞を修飾する）
- この公園はずいぶん静かだ。（形容動詞を修飾する）
- もっとはっきり話してください。（副詞を修飾する）

一部の副詞は「… の」形で名詞を修飾することもある。

- ぴかぴかのテーブル。
- まさかの時、まさかの事態。

副詞には、あり方の副詞と、各文法カテゴリーに関係する、テンスの副詞、アスペクトの副詞、モダリティの副詞、とりたての副詞などがある。

2.2 副詞の種類

2.2.1 あり方の副詞

動きや事態のあり方がどのようであるかを限定し詳しくする副詞をあり方の副詞

という。仁田(2000)によれば、状態副詞は動きや変化のしかた（様態）、あるいは出来事の付随的なありかた（状態）を表して、主として動詞を修飾する副詞である。　様態副詞

- ゆっくり（と）歩く。〈日〉
- まっすぐ行ってください。〈み 1〉

このように、どうやって、又はどんなことかの状態を示す。

結果副詞

- 廊下がぴかぴかになる。〈現 1〉
- はっきり見える。

この副詞はある事柄が続いていることを表す。

程度副詞

- 沖縄は、とても暑かった。〈現 1〉
- マリアさんはカタカナが少し分かります。〈み 1〉

ある事柄がどのように起こるかのレベルを表す。

量副詞

- 久しぶりにたっぷり寝た。〈現 1〉
- 昨日、たくさんお酒を飲んでしまいました。

この副詞は状態やものの量を表す。

2.2.2　テンスの副詞とアスペクトの副詞

テンスの副詞は、発話時を始点とした相対的な時点を表す。また、仁田(2000)によれば、時に関するものは、動詞述語に限らない。なお、「昨日、本を読んだ」の「昨日」のように、時を表す名詞が副詞的に用いられる場合も多い。

アスペクトの副詞には、さまざまなものがある。事態実現の時間的なとらえ方を表す「まだ」「もう」、「突然」「やがて」、進行の様態を取り上げる「ゆっくり」「どんど

ん」、くりかえしや頻度を表す「次々に」「いつも」、進行の過程を取り上げない「ちらっと」「かつて」などである。

- 彼はいつもやさしい。〈日〉
- 時々レストランでご飯を食べます。〈み 1〉

2.2.3 モダリティの副詞

表現類型のモダリティに関する副詞には、疑問を表す「いったい」、依頼に用いられる「ぜひ」、感嘆文に用いられる「なんて」などがある。

いったい

- いったい、どういうことだ。〈現 1〉
- それは、いったい、何と言う意味ですか。

「いったい」は疑問文の中で用いられ，強く知りたいという気持ちを表す。

ぜひ

- ぜひいらっしゃってくだい。〈現 1〉
- ぜひ北海道へ行きたいです。〈み 1〉

この文を見ると、「ぜひ」は依頼を強めて表現すると思われる。

なんて

- なんて素敵な計画だろう。
- なんてすばらしいアイデアでしょうか。

「なんて」は話し手が事柄に感心するということを表す。

認識のモダリティに関わる副詞には、確信の度合いを表す「きっと」「たぶん」「おそらく」、1 つの可能性として文を述べていることを表す「もしかすると」、観察に基づいた推定を述べる「ようだ」の文に用いられやすい「どうやら」「どうも」、比況の「ようだ」の文に用いられやすい「まるで」「あたかも」などがある。

「きっと」は事態の実現に対する話し手の信念がこめられていると思われる。「た

ぶん」は推論において直感的にある 1 つの帰結を導き出したことを表し、「おそらく」は推論において根拠に基づきある 1 つの帰結を導き出したことを表す。

「もしかすると」は命題表現の「可能性がある」と共起することがある。このことからも、「もしかすると」は当核の事態の成立を 1 つの可能性として捉える表現であることができる。

「あたかも」はあるものが他によく似ていることを表す。

そのほか、モダリティに関わる副詞には「もし」がある。「もし」は仮説条件を表す従属節で用いられる。

モダリティは言語形式の中に現れる話者の心的態度、気持ちの叙述である。日本語ではモダリティを表す要素は第一義的には文末近くの述語部分に来る。文の終結間近まで話者の主観が予想できないのは不都合なので、文末のモダリティと対応する副詞の一部を文頭近くに置くなどして、文末のモダリティを予測させることがある。それがモダリティ副詞の本質的な機能であり、いわゆる呼応の副詞の「呼応」の現象は、主にこのような性質のものである（仁田 2000）。

2.2.4 とりたての副詞

とりたて副詞は、文中のある要素をとりたて、同類のほかの事物を排除する限定の意味を表す。

「ただ」「単に」などは、ほかの事物を排除した結果、とりたてられた事物が量的、質的に限られたものになっていることを示す。

2.3 否定と呼応する副詞

副詞の中に否定と呼応する副詞がある。程度副詞には、否定と呼応して完全否定を表すものや、弱い否定を表すものもある。

- あの映画は<u>少しも</u>面白くない（程度の完全否定）
- <u>ちっとも</u>食べません。（程度の完全否定）

この文を見ると、「ちっとも」「少しも」は見積もりの小ささと共に話者の否定的判

断を表現する。

- 今日はあまり天気がよくない（程度の弱い否定）

頻度副詞にも、強い否定を表すものもある。

- 田中さんにはめったに会わない。（頻度の強否定）
- 彼女と全然会わない。（頻度の強否定）

モダリティの副詞には、否定と呼応して、否定述語で表される判断の種類を表し分けるものがある。表し分けられる判断の種類とは、完全否定判断、否定推量判断、不可能判断、完全肯定の留保判断などである。

- 鈴木さんは、決して悪い人ではない。（完全否定判断）
- まさか電車が遅れることはないだろう。（否定推量判断）
- こんなにあっては、とても食べきれない。（不可能判断）
- 金持ちが必ずしも幸せとは言えない。（完全肯定判断）

副詞の分類が複雑なことの原因として、日本語の文法の研究が品詞論を出発点として行われてきたことが指摘されるが、一方「副詞」そのものの性格がきわめて複雑であることもその要因となっている。副詞の分類ということにこだわりすぎず、副詞の機能そのものを素直に見つめると、副詞にはおおよそ次の三つの機能が考えられる。

1. 動作、状態の様子を詳しく説明する機能。
2. 話し手の気持ち、態度を述べる機能。
3. 次に述べたてる内容を何らかの形で示す誘導の機能。

このような副詞の機能を考えるにあたって大切なことは、副詞は、その複雑さはともかくとして、これらの機能を重ね備えているということである。

2.4　副詞のまとめ

『みんなの日本語１』には副詞が多く出てくる。

あり方の副詞

- 様態副詞：ゆっくり、まっすぐ。
- 程度副詞：とても、よく、だいたい、すこし、ちょっと。
- 量副詞　：少し、たくさん、全部。

テンスの副詞・アスペクトの副詞

いつも、ときどき、よく、はじめて、また、いま、すぐ、もう、まだ、これから、そろそろ、まず、後で、最近。

モダリティの副詞

ぜひ、たぶん、きっと、もし、いくら、ほんとうに、もちろん。

否定と呼応する副詞

あまり、ぜんぜん、なかなか、いちども。

『みんなの日本語１」には他の副詞類よりテンスの副詞・アスペクトの副詞の数のほうが多い。どうして、基本的なテンス・アスペクトの副詞が多くあるのだろうか。それは生徒たちにとってテンス・アスペクトの副詞のほうが分かりやすいと思われるからである。

つまり、生徒たちに副詞の分類を教えず、大切なのは副詞の使い方や意味を教えるべきである。

3. 副詞の教え方

3.1　コミュニケーション能力を育てる授業の流れ

日本語を学習しはじめたばかりの学習者が、日本語でコミュニケーションすることはできない。日本語が使えるようになるためには、言語の知識がたくさん必要である。また日本語の単語、文法などの言語の知識を学習しなければならない。

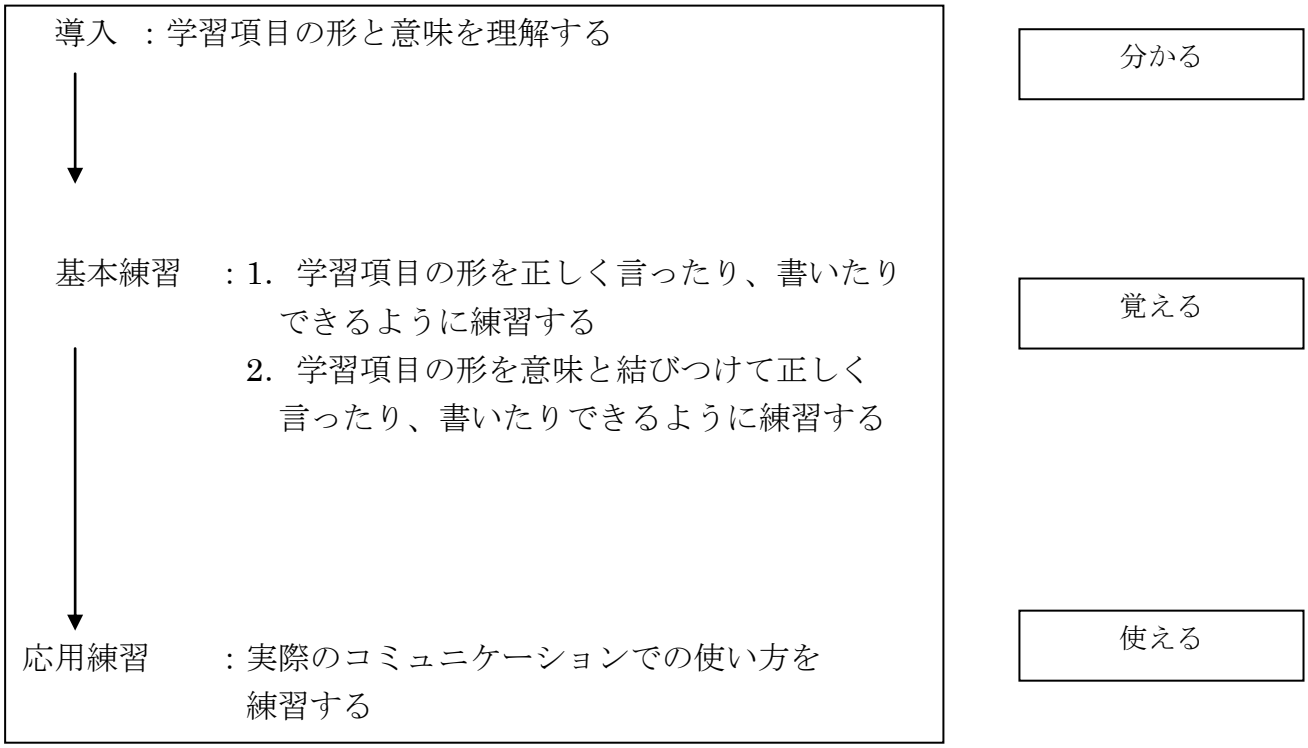
初級の段階では学習者の言語の知識の量がまだ少ないので、どうやって増やすかということがまずは必要である。特に中・高校で日本語力も少ないうえ、日本語を勉強し始めは大変なことにたくさんぶつかってしまうと思われる。言語の知識として文型

を取り上げ、文型をどのように授業であつかい、コミュニケーション能力に結びつけるのかを考えるようになった。

カナール（Canale、1983）はコミュニケーション能力に 4 つの領域（文法能力、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力）があると言っている。言語に関する知識や 4 つの技能は、その中の文法能力に当てはまるが、文法能力だけでは、外国語でスムーズにコミュニケーションができるようにはならない。相手によって話題を選んだり、使う言葉を変えたりすること（社会言語能力）が必要である。また場面に合わせて、言葉の意味を適切に理解することや、伝えたいことを相手に分かりやすく伝えるために話の流れを考えること（談話能力）も大事である。そして、うまく表現できないときにどのようにしたらよいのかを知っていること（ストラテジー能力）も重要なのである。

国際交流基金（2007）によると、コミュニケーション能力を育てるような授業の流れは、次のようになる。

授業の流れ



「学習項目」とは、それぞれの授業で新しく学習するもののことである。この章では、学習項目は語彙や文型などの言語の知識を指すことである。また、「形」とは言語形式のことで、音声や文字で表されるもののことを指す。

この授業の目的は生徒が実際の状態で日本語を「分かる、覚える、使える」ことである。実際のコミュニケーションはさまざまな状況の中で言葉を聞いたり読んだりしながら、その場で意味を理解し反応しなければならない。みんなの日本語 1 に書いてある副詞の語彙や用法に関して、応用できるようにしたい。

3.2 副詞を使った練習の例

人がある言語形式（文型など）を学習し、実際に使えるようになる（習得する）過程を示すと次のようなことを順番にしている。

3.2.1 導入

ここでは程度副詞を例に、教え方を考えてみる。

3 つの程度副詞の言葉を教える。

文字カード

これは日本語の程度副詞である。

過程：

- ローマ字で書かれた文字カードを生徒に見せ、その言葉は日本語で何というか教える。ローマ字カードを使ったら、生徒たちがこのカードに書いてある言葉を読みやすいので、盛り上がると思う。文字カードなら、どんな発音を言うかすぐ分かるというよい点もあるだろう。次に先生はこの程度副詞の言葉の意味をインドネシア語で言って、使い分けも説明する。

とても　　あまり　　ぜんぜん

インドネシア語

（Sangat）　　（Begitu）　　（Sama sekali）

インドネシア語で説明するのは以下のものである。

「とても」は肯定形を言うときに使い、「あまり」と「ぜんぜん」は否定形をいうときに使うということである。

3.2.2　基本練習

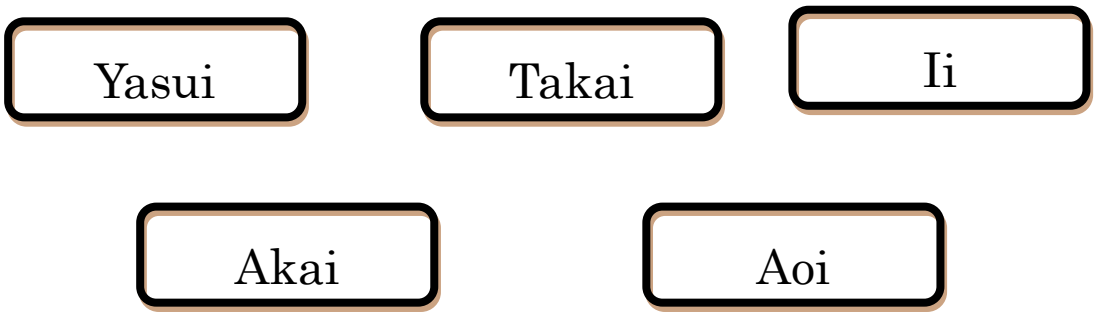
ある言葉は他の言葉を合わせて、正しい文法を使えば、適切な文章になる。先生として、場面による、文法の使い方を生徒たちに覚えさせるために、適当な教授法を考えなければいけないだろう。もちろん、文法を教える時には、どうやったら生徒たちが分かるか、どんな方法を使えば良いのかを考えるということは大変難しい。私にとって、言語形式の意味、文法規則、使いかたなどのどうやって教えるかという具体例は、以下のようなものである。

教える文法項目

とても＋形容詞／形容動詞です

あまり／ぜんぜん＋形容詞くないです／形容動詞ではありません

形容詞



形容動詞

Suki　Benri　Fuben

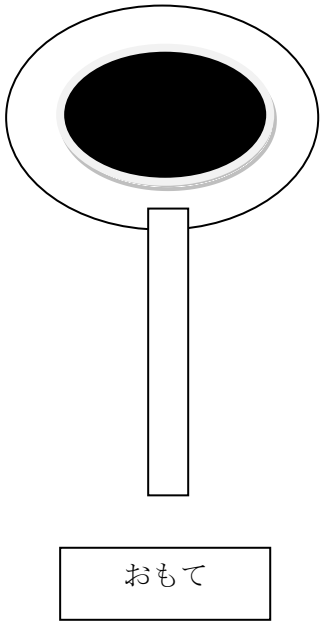
名詞

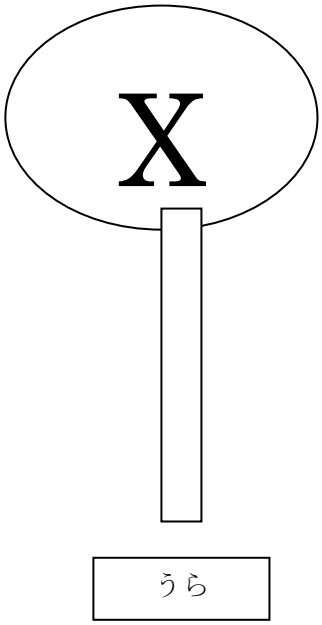
Kirai　Kirei

Jisho　Kaban　Eiga

Chikatetsu　Fujisan

また、「マル」「バツ」を示すカードを用意する。





この文法を教える前に、教材を用意しておく。次は程度副詞と文法を教える順番である。

- ローマ字で書かれた文字カードを生徒たちに見せ、読ませ、発音を言うのを正しいかどうか聞いて教える。また、意味がインドネシア語で教える。形容詞と形容詞の違いはインドネシア語でも説明する。

  インドネシア語で説明するのは以下のものである。

  先生は生徒たちに「日本語では「い」形容詞と「な」形容詞と分かれている。「な」形容詞は形容動詞に呼ばれている。だいたい「い」形容詞は言葉の末に「い」が付きますが、形容動詞はつかない。しかし、「Kirai」と「Kirei」は特別なので、言葉の末に「い」がつきますが、「い」形容詞ではなく、形容動詞になる」ということを教える。

- 生徒たちが答えた後で、正しい答えを答える。また、全部伝えてから、生徒たちにもう一回正しい答えを繰り返させる。意味を覚えるように、三回繰り返させる。次は 5 つの名詞の言葉を同じような方法で教える。生徒たちが全ての言葉の意味を覚えた後で、新しい文法を紹介する。文法の使い方を教え、勉強したところの言葉を組み合わせる。

  - Tokyo no chikatetsu wa kirei desu -------- <u>Tokyo no chikatetsu</u> wa amari/ zenzen <u>kirei dewa arimasen</u>

  “Amari / zenzen + adjective + dewa arimasen

  - Kono jisho wa furui desu ------- <u>Kono jisho</u> wa amari / zenzen <u>furu kunai</u> desu

  “Amari / zenzen + adjective (い)+ kunai desu

  否定形を教える前に、違うところを理解できるように、勉強したところの肯定形の例を挙げておく。その答えは黒板に書いておく。肯定形と否定形を教える時に、“マル”“バツ“というカードを使ってもかまわない。先生は生徒たちが肯定形文を作らせるときに、”マル“というカードを使って、否定形文を作

らせる時に、”バツ“というカードを使うことができる。

- 生徒たちに下線の言葉を他の言葉に変えさせながら、何回も繰り返させる.

この順番で行えば、上に書いてある 2 番目のポイント（その言語形式の意味、文法規則、使い方などを覚える）という目的に役立つのではないだろうか。

3.3.2 応用練習

「流ちょうに使う」は、覚えたものをゆっくり思い出しながら使うのではなく、思い出す時間をかけずになめらかに言ったり書いたりできるという意味である。この目的を達成できるように、どのような方法を使えばよいか考えた。

それには、実際のコミュニケーションの状態に近い会話文を使えばよいと考えられる。

会話文

Kaban ya de

A : Okyaku sama

B : Tenin

A: Ano, sono <u>kaban</u> wo misete kudasai

B: Dore desuka

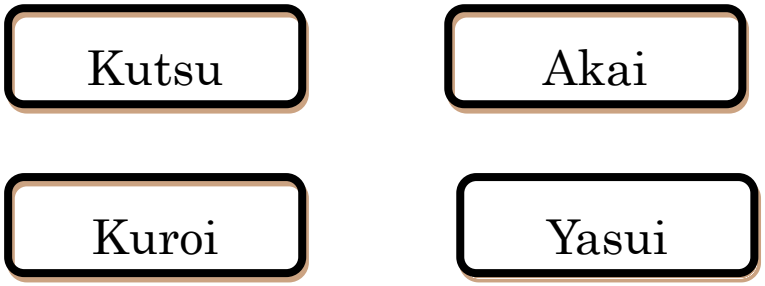
A: Ano <u>aoi kaban</u> desu

B: Kore desuka

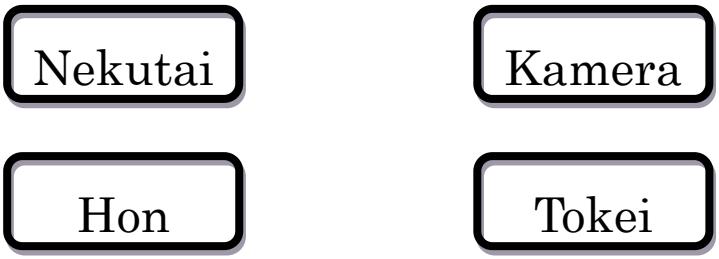
A: Hai, sou desu. Kore ha ikura desuka

B : 300.000 rupia desu

A: Hee, <u>totemo takai</u> desu ne. Ja, mata kimasu



勉強した言葉



- まず、この会話文を黒板に書いておく。はじめに、先生は発音を言って、生徒たちに全会話文を繰りかえさせる。あるいは、先生は生徒たちにインドネシア語で会話文を使わせ、日本語に翻訳させ、翻訳した会話文は先生が先に言って、生徒たち繰り返させる。
- A の会話文を先生が担当し、B の会話文を生徒たちにな担当させて二つの部分に分け、練習をする。
- 次に、先生は生徒たちを A と B のグループに分け、A グループは A の会話文、B グループは B の会話文を担当し、会話を練習させる。また、何度か読ませたあとは逆にし、会話文を繰り返させる。
- 生徒たちに下線の部分の絵カードや文字カードを見せ、文を使わせる。A グループは A 会話文の部分に戻し、B グループも B のグルプの部分に戻させる。下線文に変えた言葉で会話の練習をさせる。また、覚えるように、下線に言葉を変えた会話文を三回繰り返させる。
- 最後に、A と B のグループから代表として、一人を選び、勉強したところの言葉を使い、実際に会話をさせる。

言語の知識を実際のコミュニケーションで使える能力に結びつけるためには、生徒たちの言語習得のプロセスに合わせた授業の流れになるように活動を考え、授業を組み立てるようにする必要がある。実際のコミュニケーションは、さまざまな状況の中

で言葉を聞いたり読んだりしながら、その場で意味を理解して反応しなければならない。この国際交流基金の教授法を、教室で日本語を教えるために使おうと考えている。どんな教授法を使うか、どんな教材を使うかということも考えるようになった。また、生徒たちが「日本語は難しくて、文字も覚えにくいです」ということを言わずに、日本語に好きになるように、いろいろ授業を工夫しようと考えている。この教授法を使うことで、生徒たちに日本語を好きになってほしい。

4. まとめ

日本語の副詞やその教え方について、基本的なことが分かった。これからは、インドネシア語と日本語の副詞の違いを研究して、それを使って、副詞の教え方を考えて生きたいと思う。本橋では、仁田（2000）や日本語記述文法研究会　（2010）の分類を使って『みんなの日本語 1』に出てくる副詞を分類し、その意味を考えた。

また、コミュニケーション能力をつけるための副詞を教え方を考えた。その結果、生徒たち

考えるようになった。そのために、このレポートでまとめたような教授法を使うのが良いと考えた。この授業は三つの目的を持つ。それは以下のようなものである。

１、分かる

２、覚える

３、使える

その目的を達成するように、三つの段階を踏む必要がある。

１．導入

学習項目の形と意味を理解する

２．基本練習

学習項目の形を正しく言ったり、書いたりできるように練習する。学習項目の形を意味と結びつけて正しく言ったり、書いたりできるように練習する

３．応用練習

実際のコミュニケーションでの使い方を練習する

生徒たちが日本語を勉強するのが好きになるように、そうした教授法を使って、どんな教材をつかうかということを工夫する。

例文出典一覧

〈現 1〉:『現代日本語文法第 1 巻』くろしお出版

〈み〉:『みんなの日本語 1 』

〈日〉:『日本語の文法 3　モダリティ』

〈蓋〉:『現代日本語における蓋然性を表すモダリテイ副詞の研究』

参考文献

(1) 今井新悟（2011）『日本語多義語学習辞典（形容詞・副詞編)』アルク

(2) 国際交流基金（2007）『日本語教授法シリーズ第 6 巻 “話すことを教える”』ひつじ 書房

(3) 国際交流基金（2011）『日本語教授法シリーズ第 3 巻 “文字・語彙を教える”}』ひつじ書房

(4) 国際交流基金（2007）『日本語教授法シリーズ第 9 巻 “初級を教える”』社ひつじ書房

(5) 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（2012）“Nuansa”http: www.jpf.or.id/system/files/JPF_Nuansa_October_Final.pdf からダウンロード

(6) 国立国語研究所（1995）『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

(7) 杉村泰（2009）『現代日本語における蓋然性を表すモダリテイ副詞の研究』ひつじ書房

(8) スリーエーネットワーク(1998) 『みんなの日本語 1 』スリーエーネットワーク

(9) 日本語記述文法研究会（2010）『現代日本語文法第 1 巻』くろしお出版

(10) 仁田義雄（2000）「副詞の分類」森山卓郎、仁田義雄、工藤浩（2000）『日本語文法 3 “モダリティ”』岩波書店

(11) 森田良行（2008）『動詞、形容詞、形容動詞、副詞の辞典』東京堂出版